

『スターリン問題研究序説』をめぐる経緯

佐々木洋

(札幌学院大学名誉教授)

加藤さんがいう、『序説』の「企画に巻き込まれた」佐々木の立場からいくつか補足します。

(1) 動機のひとつ——自分がいかに無自覚のうちにスターリン主義に汚染されていたか、の発見

『序説』編著者のひとりの中野徹三さんは、初対面の方々のいる懇親会などで、「佐々木君は若いころ、大変まじめな活動家でした。例えば、白鳥事件を、ながい間、冤罪事件と信じていたようです」と、私の「他己紹介」をすることがありました。「まじめ」という表現は、分かりにくいですが、私は、学生と院生の時代に、かなり「忠誠な」活動家だったのはたしかです。不勉強の裏返しに、信じ

やすい学生・院生時代を過ごしました。

この草稿を書くため、最近しばらくぶりに、やはり編著者のひとりである藤井一行先生の画期的な労作、『社会主義と自由』（一九七六年刊）をひも解きました。するとすぐに、冒頭の序文で、「社会主義と自由」をテーマとする研究をとおして、「マルクス主義についての自分のこれまでの理解がいかに無自覚のうちにスターリン主義に「汚染」されていたか」を痛感されたとお書きになっている箇所が目にとまりました。藤井先生が、そのような自己分析をされた契機は、一九六八年のソ連滞在のご経験と、その直後のワルシヤワ条約機構軍によるブラハの春の圧殺であったようです。

妥協を許さない社会思想家として知られる

藤井先生が、そのように仰いますと、私のような不勉強もののケースをもちだすのはとても気が引けるのですが、私もあるとき、あとで述べますように、自分の言動に、スターリン主義に汚染された面が多いことが分かってきたとき、愕然としたことがあります。

実は、私が、非力と不勉強をわきまえながら、それでも敢えて、『序説』第三章として拙稿「スターリン主義と「トロツキイ問題」——「工業化テーゼ」をめぐる社会主義論の一考察」を書くに至った動機のなかに、そうした、つい先ごろまでの自分の認識が、大変な誤りだったことへの忸怩たる思いがあったことは間違いありません。

私は、「札幌唯研」の会員でもなく、「スターリン問題研究会」を立ち上げる計画についても、圏外にいて、たまたま、中野さんと同じ職場にいた関係から、「研究会」の発足を聞き、オブザーバーとして参加させてもらった人間でした。したがって、ここでは、『序説』の要におられた中野さん、藤井さん、加藤さんの、正史というべきオーラルヒストリーとは別個に、『序説』にはこういう面もありました、という付録の話をしたいと思えます。

また、そのような「付録」があるほうが、

マイナーな発言にしかありませんが、当時の状況や、当時の歴史的な位相を考えるうえで、半面の素材を提供できると思うからです。アトラダムですが、以下が付録です。

最初は、拙稿第三章の意図と、執筆当時の執筆の舞台裏についてです。

次に、ミイラ取りがミイラになった「トロツキー研究」のこと。

第三に、ソルジェニーツィンとメドヴェージェフ双生児から受けた影響。

第四に、「スタ研」の始まりと私の本業。

第五は、加藤さんのいう、『序説』の、「意図せざる」結果と反響に関して。

最後は、いささか宣伝くさくなりますが、『序説』が機縁となったメドヴェージェフ双生児との交流です。

(2) 『序説』第三章の主眼と執筆当時の舞台裏

2-1-1) 加藤インタビュアーにあるように、加藤さんと同じ六八年世代の海野八尋氏が、『日本の科学者』誌(七八年五月号)に『序説』評を寄せました。海野氏は、『序説』の刊行は歓迎すべきことで、執筆陣の一層の活躍を期待すると述べたうえで、大変有難いことに、各章に逐一、批判的なコメントをしてくれま

した。私の分担章に対しては、論旨に賛成できる側面もあるが、「経済建設におけるトロツキーとスターリンの対立を、当時のソビエト経済の実情と関連させて検討しないと両者の対立の意義が鮮明にならない。この点に触れている既刊(例えば岡本正氏や上島武氏の著書のこと(引用者))の研究以上の掘り下げがないことに不満が残る」と指摘しています。

「日本科学者会議」と縁のない私は、当時、このご書評に気づかず、海野さんに対し大変な失礼をしました。しかし、海野氏の指摘は、私の甚だ痛いところをグサリと突いており、何らの反論の余地もないものでした。

拙稿第三章は、トロツキーを提案者とする一九二三年の第一二回大会「工業化テーゼ」を取りあげ、この大会の主要論点を紹介することにより、その後、スターリン派が、トロツキーを「レーニン主義の敵」として、あるいは「反革命分子」として糾弾する場合に、常にその論拠としてきた、トロツキーが「ネップを否定した」とか「労農同盟を無視した」という批判などが、まったく歴史的な事実に戻すことを論証しようとしたものです。

海野氏は、私の意図は認めつつ、然るべき

先行研究を踏まえた論考にはなっていないと批判したわけでした。

レーニンが死の床にあつた一九二三年春の、「工業化の大会」といわれた一二回大会は、革命政権がネップ(新経済政策)に移行してまる二年後のことです。レーニンが銃剣(労農赤軍)を突きつけ、農民から食糧を強制調達する「戦時共産主義」の間違いに気づき、市場の容認と農民との和解に転換して以降、農村と農民経済は比較的順調に回復していきますが、今度は、回復の進む農村経済からの工業品への需要の拡大に都市の工業が適切に対応できなくなっています。工業設備の不足と極度の老朽化が深刻になっていました。「工業化」とは、都市の工業に課された急速な回復・増産と、そのための固定資本の更新と新規投資の財源をどうするかという問題でした。スターリンによる一九二八年からの「五カ年計画」方式による「工業化」は、その財源を、まさに農民からの過酷な収奪に求め、やがてそれが、農業の「強制的集団化」につながっていきます。

トロツキーが提案した「工業化テーゼ」は、ポリシェヴィキ党が、工業の急速な拡充の必要を確認するとともに、農民との「同盟」ス

ムイチカ」の重要さをも再確認するものでした。それゆえ、トロツキーの工業化思想に、農民への軽視とか、統一戦線の欠落とかを見出し、トロツキーを弾劾するのは間違いです。農民敵視の「戦時共産主義」の誤りは、レニンを含むボリシェヴィキ共通の誤りでした。「一二回大会テーゼ」は、工業化のための資金源の課題を明示できませんでした。トロツキーにも、他の論客にも明示できなかったのです。トロツキー派のプレオブラジェンスキーの「原始的蓄積理論」には、農民からの無慈悲な収奪を連想させる面がありました。しかし、彼が実際に、農民からの過酷な収奪を提案したわけではありません。プレオブラジェンスキーは、急テンポの工業化のためには工業内部の蓄積（工業労働者の勤勉性）だけでは足りなくなるといふ、ボリシェヴィキ全体が抱える難問の、純理論的な骨格をクリアーに描いたのです。

2-1-2) 私は、右の論稿を七七年九月末に何とか書きあげ、大月の加藤さんに送りました。加藤さんからは、何度も論旨のゆれや、意味の不鮮明な箇所の照会があり、その都度、補足をしたり、書き直したりしました。

『序説』は七七年一二月に刊行されるので

すが、その三か月前の、加藤さんからの九月六日付けの「督促書」には、九月一杯までに原稿を提出しないと、年内の刊行は困難であるという檄があります。その二〇日前の八月一五日付のやはり加藤さんからの、「暑中見舞い」状は、とくに私個人に対して、「短くてもかまいませんから、とにかく、一論点でも提示しうる論文をぜひお願いします。中野・高岡先生とよくご相談を」という朱筆で締めくくられていました。

実際、期限通り原稿を出された藤井さんの迫力と、加藤さんの大月編集部側の「危機感」とは、他の執筆陣に対し強烈な印象を与え、それを背景に、中野さんが、たぶん九月の下旬だったと思いますが、私の自宅まで、「督励」に見えました。執筆期限のこともさることながら、私の論考のレベルも大いに気がかりだったでしょう。

八月時点ではまだ、「スターリン批判」とトロツキズム」について何か書くという程度の漠としたテーマ案を、「スターリン主義と「トロツキイ問題」——「工業化テーゼ」をめぐる社会主義論の一考察」という、まさに「一論点」だけに絞りこみ、実際に、試行錯誤の執筆を開始したのが八月末か九月初めであつ

たと記憶します。

ところが、ソ連共産党（ボ）第一二回大会の「工業化テーゼ」を論ずるといふのに、わが佐々木君が、必須の原典であるボルシェヴィキ党第一二回大会報告と討議の全議事録を使用しないというのは大変困る、というメッセージであつたと思われたのですが、金沢の藤井先生から、分厚いロシア語原典が送られてきました。しかし、私はロシア語が皆目、出来ない訳です。当時の日ソ協会の「ロシア語講座」に通つて、出席率が良いからと「中級クラス修了書」を貰つたのですが、それですぐ「議事録」が読めるようにはなりません。私を「救つて」くれたのが、南満州鉄道（満鉄）による労農露国調査資料邦訳シリーズの第二十五篇『露国工業経営に関する指導的意見』でした。これは藤井さんから届いた露文原典の忠実な邦訳資料でした。私はこうして、大会じたいが「工業化大会」といわれた一九二四年の第一二回大会の「工業化テーゼ」論議の紹介と引用を邦文文献と露文文献の双方を参照しながら進めることができるようになりました。

海野さんが指摘された先行研究とは、具体的には、岡本・上島・建林隆喜共著『現代社

会主義経済論』（一九七四年）と、わが『序説』刊行の四カ月前に出た上島武氏の単著『ソヴエト経済史序説』だろうと思われませんが、前者については、不勉強の私は存じあげず、後者については、上島氏のトロツキー観およびプレオブラジェンスキー観を知って非常に勇気づけられました。拙稿では、三か所ほど、上島著に依拠している旨、注記してあります。ただし、当時の私の力量では、非常に優れた上島著の内容全体を適切に理解しえていたとは言えません。

『序説』刊行後の反省会で、読者から寄せられた反響を素材として提起された、「先行研究、当該問題についての研究史についての言及の弱さ」も、まさに、海野さんの第三章批判と同じ指摘です。

こうした批判点は、読者から現に批判を受ける以前から、編著者と編集部も懸念していたことであると私は感じていました。具体的には私の問題点であり、第三章にかかわる問題であるからです。「先行研究、当該問題についての研究史」を踏まえるべきこと、その懸念が凶星となるような論稿では困る、いうメッセージは編著者と編集部が当初から懸念していた難問だったろうと思います。それは

また、とくに私に対する注文だと分かっていたましたが、しかし、私の非力ではいかんともしたい課題であり、それをクリアすることはできませんでした。

『序説』刊行三か月後の七八年二月の「文責・加藤哲郎」とある「読者カード分析」に よりますと、読者からの批判は、「a」スターリン「個人」に問題が結局限定されているのではないかと、「b」歴史的背景を含め、歴史の中に位置づける視点が弱いのではないかと、「c」「科学的社会主義」の立場から書かれた意義は認めるが、これまで「正統派」の外では「常識」とされていたものをこえていない、ないしは「やきなおし」ではないかと、といった諸点に集中している、と紹介したうえ、これらは、本書の編集作業の中でも予想されていた「声」であって、謙虚にうけとめる必要があると、指摘しています。加藤分析によると、読者からの批判はほかに、「マルクスに帰れ」「晩年のレーニン基準」的発想Ⅱ方法に対する疑問などとして寄せられていたとのことでした。

編著者三氏の論考には、該当しませんが、こと第三章に関しては、批判が全てびつたり当てはまります。

繰り返しになりますが、私は、そうした「声」のあることは、担当の章を執筆する前から知っており、中野さんや藤井さんが、私の論稿の出来栄を懸念していたことも分かっていた。しかし、開き直るようでも申し訳ありません。私の力量と時間的猶予のなかでは、如何ともしがたいものでした。そして、不遜なこととお叱りを受けそうですが、当時の意識では、たとえ学術的な価値においてはほとんど無内容に近いものでも、書いて活字にする意義があるのではないかと考えていたのです。

加藤さんはインタビューで「佐々木さんは相当意識していたかもしれない」と発言していますが、たとえレベルの低い論稿であっても、この際活字にする意義はあると、自分に言い聞かせて書いたという意味では、加藤さんの言うニュアンスとは異なりますが、「意識していた」ことは事実です。

それは、『スターリン問題研究序説』として刊行される書物が、「トロツキー問題」を取り上げない書物として出るのであれば、刊行する意義も激減してしまうだろう、という思いに端を発するものでした。

私の意識では、「トロツキー問題」の柱が

ない「スターリン主義批判」はありえないように思っていたのです。

そこで次に、私自身がはからずもトロツキ―と遭遇したその出会いを紹介しましょう。

(3) 非力な研究者のミイラ取りがミイラに

3―1) ことの起こりは、私が、修士課程を終わる満二六歳のときに、手書きの、あまりばつとしない修士論文だけの業績で、札幌短期大学商学科（のちに現・札幌学院大学に吸収）の「マーケティング（商業経済論）」の担当者として、自分でもあつけないほど簡単に就職が決まったことからはじまります。現在の大学院生やポスドクの方々の大変な就職難の時代には信じられないことです。一九六九年春のことでした。日本経済の高度経済成長期のピークに大学・短大の新増設ブームもまた本格化していて、私のような限界的な大学院生でも比較的容易に「命がけの飛躍」ができた時代の恩恵を受けたのです。当時の弱小私大・短大には修士資格を取得したばかりの同期の新任教員が少なくありませんでした。

私は、大学院二年目の年に、北大の農学研究科の大学院生協議会の副議長をしていまし

たが、翌年度に博士課程に進学した暁には、全学の大学院生協議会の主要役員の一人になることが「内定」しておりました。

ところが、修士論文をまとめていた六九年二月に、私は指導教授から急に呼び出され、「君のような院生には、博士課程に進んでも、然るべき就職先は見つからないかもしれない。ごく最近、ある私立大学から、誰か院生を推薦するようにという依頼が来た。私は君を推薦しておいた」と引導を渡されてしまいます。

私は学部生のころ、民青系の運動に明け暮れ、勉強しませんでした。そのため少しは勉学を挽回したいと、修士課程に拾ってもらったのですが、なかなか足を洗わないので、指導教授が観念していたのだと思います。

ところが、六八年の日大闘争・東大闘争につづいて、六九年春には北大でも全共闘系によるゲバルトと封鎖騒ぎが始まり、私以外の、博士課程に進んだ仲間のみならず、とても落ち着いて研究する状況にない環境に突然追い込まれてしまいます。二四時間が自由に処分できる時間であり、しかも月給がもらえる立場に急変した私は、同僚から大変羨望の眼で見られる存在となり、こうしたコントラストの中

で、自分は何をなすべきかが鋭く・重く問われました。封鎖騒ぎの圏外の安全な仕事場にいる研究者として、過酷な環境におかれた同僚たちに報いる研究テーマが何かあるのではないか。三月末から四月初めにかけて考えました。ある日、北大の体育館近くで、ヘルメットと手拭いで顔を隠し、角材や鉄パイプで威嚇する、全国系列ごとに分かれたヘルメット部隊のジグザグ行進を見ながら、私は、にわか「トロツキー批判」ないし「トロツキズム批判」の重要性に思い当ったのです。

当時まで私は、ある意味で、まじめで忠実な民青系活動家の一人でしたから、全共闘系も革マル系も、ともにトロツキスト暴力集団であると思いついて、「トロツキズムがなぜ凶暴な全共闘や新左翼のような小ブル急進主義として再生産されるのか」を解明できれば、少しは、友人らの労苦に報いることができるかと考えたのです。

幸い、赴任先の札幌短大の図書館には現代思潮社版の第一期・第二期『トロツキー選集』とその補巻が全巻揃っていました。大月版『スターリン全集』もありました。そこで、適宜、ドイッチャーの三部作（武装せる預言者・トロツキー／武力なき預言者・トロツキー／追

放された預言者・トロツキー」とE・H・カ
ーの二部作／五巻本（ポリシエヴィキ革命／
一国社会主義）を参照しながら、記憶が精確
とはいえませんが、半年余りか一年をかけて、
とにかく、『トロツキー選集』を全巻、読破
してみました。

ところが、困ったことに、トロツキズムの
批判的解明を意図して、まずはトロツキーの
言説を知ろうと読み始めたはずなのに、当の
トロツキー本人の魅力に惹かれつつある自分
の変化に気づき始め、悩みました。これでは
まずいと思う部分も自分のなかにおいて、逆方
向へのねじを回します。こうして榊利夫著『現
代トロツキズム批判』や宮森繁著『トロツキ
ズムとはなにか』、共産党の出版部による『挑
発者 トロツキストの正体』などを何度も精
読しますが、次第にもう効き目がなくなっ
ていきます。私と似たような悩みをもつ読者が
いたのかも知れませんが、「民主的」な活動
家たちが迷わないようにと、七〇〜七一年に
大月から、坂井信義・村田陽一編訳『レーニ
ン主義の敵Ⅱトロツキズム』と、坂井信義訳
『革命か冒険か』が相次いで刊行されました。
そこで、私は月給取りでしたから、坂井訳も
村田訳も出ると直ぐ自費で購入し、坂井氏や

村田氏がトロツキーを「冒険家」とか「レー
ニン主義の敵」とかと断定する根拠と措定し
ているらしい箇所を探して、「スペイン革命」
や「テロリズムと共産主義」などをふくめ、
トロツキー本人の言説との照合をしてみる
日々もありました。

トロツキーを酷評する坂井訳や村田訳の大
月本を読み、ドイツチャー三部作とE・H・
カー二部作のトロツキー観を対照してみ、
一九七一年〜七二年には、ハッキリと後者に
軍配をあげるようになっていましたが、それ
でも、私の判断は十分に確信あるものではあ
りませんでした。

3-2) それではなぜ、私がトロツキーにこ
だわったのか、少し補足をおさしましょう。
加藤さんや海野さんの六八年世代とはほん
の数年の違いですが、時間差があるという事
情があつたと思います。

六〇年安保当時の、榊美智子のショッキン
グな事件は、私たちの学年が高校三年のとき
でした。私も静岡の駿府城近くで高校生集会
があるという知らせを、通学の自転車置き場
に撒かれた高校生向けチラシで知り、友人と
一緒に清水から静鉄電車に乗って、集会とデ
モの見学に行った記憶があります。

六二年春に大学に入ると、北大キャンパス
には、六〇年安保の余韻はあるものの、道学
連や各自治会執行部が、クラスオルグ等で提
起する課題は、何といっても米ソ核実験反対
でした。文学部自治会と、ごく少数の学寮自
治会をのぞくと、当時、主導権を握っていた
のはマル学同と言われたグループです。札幌
医大も北海道学芸大学も同様だったと記憶し
ます。フルシチョフによる史上最大の五〇メ
ガトン水爆実験をふくめ、米ソが核開発で凌
ぎを削っていました。誰にも異論のないはず
の米ソ核実験に対する反対運動でしたので、
わがクラスでもこぞって道学連のデモに呼応
していました。常時、一〇〇〇名を下らない
学生を集めては街頭に繰り出していたと思
います。

もしも、寮歌『都ぞ弥生』で知られた教養
部生向けの恵迪寮（けいてきりょう）に入寮
できると、生活費が格安になると聞き、寮生
活を知るのに、頻繁に恵迪寮に見学にいきま
すと、寮生大会がしょっちゅう召集されます。
その大会を見学していると、立錐の余地もな
い集会場で寮生が二派に分かれていて激しい
論戦を繰り広げており、いつもきまって執行
部側のマル学同派が、ダブルスコア以上の大

差で民青系のグループを打ち負かしてしました。

私は選考試験に落ちて入寮できませんでしたが、寮生の友人が多かったのでよく寮に泊まりに行きました。

全共闘系やゲバルト系新左翼が角材をふりまわす以前のことですから、議論は白熱しているても、ゲームのルールは公平で、多数決原理が立派に貫徹していました。それにしても民青系は、見るも無残な少数派として孤立しているようでした。それもそのはずです。前年（一九六一年）八月の原水禁世界大会は、ソ連や中国の公式代表団も含めて、「今後、最初に核実験を再開する国は人類の敵である」と宣言したのですが、何と、ソ連政府がその八月中に、ベルリンの「壁」を構築するとともに、九月一日から一方的に核実験を再開しました。これに対し当時の野坂参三共産党議長は、「たとえ死の灰の問題があろうと大の虫を生かすため」にソ連を擁護するという声明を、同日付けでアカハタの号外に掲載しました。翌年の六二年八月にはソ連は、まさに原水禁世界大会の開会期間中に核実験を強行します。こうした最中に、民青系の活動家が、「ソ連の核実験は米帝国主義に強い

られた防衛的な核実験であり、ソ連が国連で主張している完全軍縮の提案こそが、真の平和的な解決の糸口になるのであって、米ソ核実験反対、スターリニスト日共打倒というスローガンはアメリカ帝国主義を喜ばず、反共主義以外の何ものでもない」と、いくら弁明と主張を繰り返しても、彼らの劣勢はとてども挽回できるものではありませんでした。全国各地で民青系の活動家が押しなべてひどく孤立していたのは、理由があつてのことです。ちなみに共産党の宮本顕治委員長がようやく「社会主義国の核実験でも今後は反対する」と発言するのは、一〇年あまり後の一九七三年七月のことです。

ただし、私は入学翌月の五月以降、石狩川の河口近くの茨戸公園にある北大ボート部の合宿所で寝起きしていましたので、どちらのセクトからも勧誘はありませんでした。しかし、秋の教養部学生自治会選挙の前に、同じクラスの勉強家の学生から「教養一年連絡会議」主催の合宿学習会があると声がかかりました。出てみると、各クラスからも結構、弁舌爽やかな活動家諸君が参加しています。北大では折しも、現役自衛官の理学部受け入れ問題が持ちあがっていて、この課題を、当時全

国的に問題化していた大管法反対や日韓条約反対闘争と結びつけ、教職員組合や大学院生協議会との学内共闘を広めることで主導権を奪い返し、自治会選挙でマル学同系執行部に雪辱を期すというシナリオの活動が始まっていました。私にも、そうした方向性なら、専ら「米ソ核実験反対、日共スターリニスト官僚打倒」を叫ぶマル学同派の主張に比べ、より展望のある路線のように見えてきました。私は、この「教一連」のメンバーとなり、その手伝いを引き受けるようになります。とはいえ、ソ連と中国の核実験問題に関しては、民青側の主張に難のあることがずっとあとまで気になっていました。

「教一連」は秋の選挙に負けましたが、翌年二月の選挙では逆転し、民青系執行部が誕生します。その延長上にやがて道学連執行部の主導権も民青系が奪還し、この動きがいわゆる「平民学連」の結成に連動していきます。ただ、私にとつて悩ましかったのは、頭脳明晰で弁の立つ「教一連」諸君が、教養部や他学部の自治会の、また道学連の、いわば「表」の幹部になつていき、私のように話術や思考力に劣る人間には、「裏」で毎晩会議・会議に追われる民青の幹部の仕事がまわってきた

ことです。私が著しく不勉強な学生になった一因でもあります。

一九六三年に米英ソが大気圏内の核実験を禁止する部分核停条約が発効すると、学生運動のテーマから米ソ核実験問題が後景に退き、六〇年代半ばからは、ベトナム反戦の時代に移っていきます。

日大闘争と東大闘争を機に全共闘運動が台頭してきたとき、私は、自分の身近に、全共闘運動の担い手やそれに詳しい知人がいなかったこともあって、彼らの運動の特性がよく理解できず、六〇年安保世代の一部にうけいれられたトロツキズムが、七〇年安保を前に、全共闘運動という新たな装いで再生しつつあるというように誤解していました。総じて一九六九年いっぱいまで、日本共産党が言っていた、「全共闘や革マル派や中核派などのトロツキスト暴力集団」という規定を、かなり真に受けていたと思います。

教養部時代も学部学生時代でも、自分のクラスや学科には、民青系もいれば民青嫌いもいる。マル学同派もいればそのシンパもいました。どの大学でも同じだと思われませんが、私たちの世代では、セクトやシンパの色分けの違いがクラス討議の障害になることはな

ったように記憶します。私も反民青系の活動家から、君のトロツキの理解がおかしいぞと、よく説教されることがありましたが、それも友好的な議論のうちでした。

したがって、ここで改めて申し上げますが、私が一九六九年春に、にわかと思いついた「トロツキー批判研究」とは、六〇年代末期に、意見の異なる大学の構成員に対し傍若無人に角材や鉄パイプで襲いかかるようになった、全共闘や革マル派や中核派などのゲバルトを正当化する彼らの理論的・思想的な基礎に、トロツキズムがあるとすれば、そうしたトロツキズムの犯罪的な性格を説明しなければならぬというものでした。

ただし、私が札幌大に就職して、夜・昼の「商業経済論」や慣れない「外国書講読」の準備に追われながら、その合間をぬって、トロツキーを読んでいるということについては、誰にもしやべっておりませんでした。トロツキーとトロツキズムの問題に対する、加藤さんと私との受けとめ方の差異には、おそらく、以上のような時間軸のズレと、全共闘にたいする認識の位相が関連していたのではないかと思います。

(4) ソルジェニーツィンとメドヴェージェフ 双生児、とくに後者から受けたインパクト

4-1 『序説』構想が生まれてくる時代背景としては、藤井先生もご指摘になると思いますが、旧ソ連の異論派ないし反体制民主化運動があたえたインパクトも大きいと思われます。

「プラハの春」が鎮圧された一九六八年に、西側メディアでソ連国内の異論派の活動が報道され始めます。サミズダート(地下出版物)のサハロフ著『進歩、平和共存および知的自由』が六九年にみずす書房から刊行されて注目されました。この本で異論派の歴史家ロイ・メドヴェージェフが一四〇〇頁もの地下出版物を回覧させていることが知られ、幻の歴史書として西側の関心を集めます(一九七〇年に英語版『歴史の審判に向けて——スターリン主義の起源と帰結』が刊行、邦訳版が一九七三〜七四年に『共産主義とは何か(上下)』として刊行)。

しかし、旧ソ連異論派の存在が広範に知られるようになった契機は何といつても、一九七〇年一〇月のソルジェニーツィンへのノーベル賞授与の発表以降でしょう。日本でも『イ

ヴァン・デニーソヴィッチの一日』や『ガン病棟』、『煉獄の中で』がすでに出ていますが、それらが文庫本として急速に普及していきます。七三年には長編『収容所群島』の分冊刊行が始まります。

私は『煉獄の中で』が最初で、『一九一四年八月』が二番目だったと記憶しますがいつ読んだのかは分かりません。

手持ちの「ソルジェニーツィン」ファイルに収めてある、一番古い部類のコピーが『朝日ジャーナル』誌七四年三月一日号に載った植谷雄高と木村浩のソルジェニーツィン追放に関する論考や、同月一五日号のロイ・メドヴェージェフの論考『「収容所列島」は無情にも真実だ』（ニューヨーク・タイムス紙載稿の邦訳）、あるいは三月の菊地昌典氏と松岡英夫氏との毎日新聞での連載対談のメモ書きです。そして、このころ、三一書房から出たロイの石堂清倫訳『共産主義とは何か(上)』を貪り読み、分厚い下巻が出るとすぐ走り読みしたのを覚えています。八月にはロイの双子の兄ジョレスの著書『ソルジェニーツィンの闘い』（安井侑子邦訳）が公刊され夢中になりました。放射線分子生物学者であり加齢学者であるジョレスの『レイセンコ学説の興

亡』（安井侑子訳）の存在は、ロイ邦訳書上巻の石堂氏の訳者あとがきで知るのですが、金光不二夫訳で七二年六月に出ていました。この本は、七四年に同じ学園の生物学担当教員の鮫島和子さん（故人）から「いい本だから」と譲り受けました。

石堂訳と安井訳の訳者あとがきでは、ジョレスが、ソ連国内で発禁とされた弟ロイの『歴史の審判』と自著『興亡』とともに米国で公刊したかどで、七〇年に一時、カルーガ州の精神病棟に拘禁されたこと、そして、七三年には英国出張中にソ連国籍を剥奪され、以来、ロンドンの王立医学研究所に迎えられて旺盛な執筆活動を展開していることも知りました。当時はまさか、私が後日、ジョレス著『ソヴェエト農業』の邦訳者となり、あるいは、双生児共著の邦訳書『ソルジェニーツィンとサハロフ』（二〇〇五年）に拙稿解題「メドヴェージェフ兄弟のソルジェニーツィンおよびサハロフとのトリプルな関係」を寄せることになるなどとは思いませんでした。4-2) ソルジェニーツィンのノーベル賞受章と国外追放とを媒介としてめぐりあつたメドヴェージェフ兄弟の存在と二人の世界は、ミイラ取りがミイラとなつた私に、ソ連史を

見る座標軸を提供してくれた観があります。それにはとくに二つあって、ひとつはトロツキーの全体像をどう見るかに関して、ロシア革命史を鳥瞰する座標軸を示してくれたように思います。ロイのトロツキーに対する評価は至つて辛いものですが、それでもロイは、トロツキーをロシア革命の最大の功労者の一人と見なしており、反革命分子などという評価はどこでもしていないからです。おかげで、私は以後、トロツキー問題で悩むことがなくなりました。

もうひとつは、前述した「自分がいかに無自覚のうちにスターリン主義に汚染されていたか、の発見」です。別のいい方をすれば、「自分も『小スターリン』のひとりではなかったか、の発見」です。

ロイは『歴史の審判』第二部第一章「スターリンの権力横奪を容易にした諸条件について」の第一〇項で、スターリンを支えた残酷で無定見なスターリン親衛隊を特徴づけたあとに、こう述べています。長いですが、全文引用します。

「だから、スターリンは、いやおうなしに、見解と型のちがった人間をも、国家と党の

指導部に引き入れなければならなかった。たとえば、党指導部には、ほとんどすべての点についてスターリンを支持し、彼の助言と指示を遂行したが、彼の多数の犯罪のことは知らないといった比較的若い活動家もいた。この連中は、スターリン側近に特有の若干の欠陥はもっていたが、それでもやはり人民と党に誠実に奉仕しようとしていた。だが、彼らは、政治的経験が不足なため、国内に起こっている悲劇的事件を説明することができなかった。……」。

三一書房版二八四頁のこのパラグラフを目にしたとき、他人ごとではなく、私のようなタイプの人間を指していると思いました。私が一九三〇年の若いソヴィエト国民だったらロイの言う第三グループの典型になっていたのではないか。「教一連」幹部がおもての自治会役員として活躍するようになったとき、不勉強で、しかもろくに活動経験がないのに、突然、裏方の民青組織の幹部に抜擢されて以降、私はもっぱら上位下達機構のただの歯車の機能しか演じてこなかったのではないか。そういう自分を発見した思いがしたわけ

ジョレスとロイのそれぞれのサミズダート（タイプ稿の地下回覧本）は一九六〇年代半ば以前から出まわりはじめますが、その著名な例が、数千名が読んだという、後にジョレス著『ルイセンコ学説の興亡』として海外で出版されるもののサミズダートでした。このタイプ稿の回覧経路は異論派たちの連絡経路と重なるところがあり、二人は、いつとき、作家や物理学者などの様々な色合いの異論派が交流し合う媒介役をつとめました。こうして、とくにジョレスには、カピツアやソルジェニーツイン、サハロフなどの、多くの人士が面会を求めてきます。彼らがまた、一九七〇年に精神病棟に拘禁されたジョレスの釈放運動に寄与します。ジョレス著『ソルジェニーツインの闘い』は、ソルジェニーツインの作品をめぐるエピソードのほかに、カピツアによる、ノーベル賞受賞者でトロツキストの物理学者ランダウの救出劇なども多々紹介されていて、一気に読ませる「文学案内」です。

ただ、おそらく、ロイ『歴史の審判に向けて（邦訳名 共産主義とは何か）』とジョレス『ソルジェニーツインの闘い』の二つを読み終えたところから、その興奮を自分の胸の内

に止めおくことができず、札幌大の夜・昼のゼミの学生に、ソルジェニーツインの文学とロイの歴史学について、熱っぽく語りかけたことがあるのだろうかと思われまます。七四年五月には、明和生協（札幌商科大学（現札幌学院大学）と札幌短期大学を学校法人「明和学園」が経営していた）の新入組員歓迎講演会で、私は「ソ連の「反体制」運動のゆくえ——ソルジェニーツインの文学とメドヴェージェフの歴史学」というテーマで講師をつとめています。

同年一〇月には短大夜間部の勤労学生諸君からの依頼により、二部（夜間部）大学祭でも、講演しました。ソルジェニーツインはこの年の二月に逮捕され、直ちに国外追放されています。学生諸君のなかにも、ソルジェニーツイン問題に関心をもつ諸君がかなりいたのだと思います。

札幌大昼間部の学友会は道学連加盟自治会ではありませんでしたが、道学連サマー・キャンプ実行委員会か何かの会合で、キャンプ場での記念講演を依頼できる人はいないかと聞かれて、私を推薦したと聞き、おそらく七五年夏のことであったと思われるが、支笏湖のモーラップ・キャンプ場で、やはり「ソ

ルジェニーツインの文学とメドヴェージェフの歴史学」をテーマに講演する機会がありました。

詳しいレジュメが残っているのは、夜間部大学祭のものですが、「ソ連の反体制運動とソルジェニーツインの二重の悲劇性」というタイトルになっています。内容の七割がたは、ジョレスの『ソルジェニーツインの闘い』とロイの『共産主義とは何か』を受け売りしたのですが、もうひとつ、明らかに、藤井一行先生が一九七六年に上梓された『社会主義と自由』の初出論考から無断でお借りしたものが多く、「マルクス主義にとつての出版の自由、社会主義と民主主義」という項目も含まれています。

レジュメだけみると、かなり立派な講演をしたような誤解を与えますが、私自身のオリジナル리티のものはなく、あくまでもメドヴェージェフ兄弟と藤井先生の受け売りに過ぎませんでした。

中野先生から、「スターリン問題の研究会」があるから、出てみないかという誘いがあったのは、私が、以上のような流れのなかにいた七四年〜七五年のいつかの時点であつたらうと思われま

(5) 「スタ研」のはじまりと、私の本業、「督促」の暑中見舞い

5-1-1) 中野さんの札幌商科大と私の札幌短大とは、設置場所が離れていましたが、学校法人の事務局は札幌の街中の短大にありました。中野さんは、所属が商科大学でしたが、法人の常務理事も兼務していましたので、私は中野さんとほとんど毎週顔を合わせていました。しかし、中野さんと自分の個人的な問題関心について話すことはありませんでした。したがって、「スタ研」の誘いも、私の「ミイラ取りのミイラ化」を知つての誘いではなかつたように思います。

藤井先生とは、先生が札幌大学に赴任されていた時期に、北海道私大教祖の会合や何かの研究会でお会いしたほかは、個人的にお目にかかつてお話しするような機会は、七五年一二月に始まる第一回の「スターリン問題」の研究会の場がおそらく最初であつたように思われます。

七五年暮れの第一回研究会に大月書店側から来られたのは、篠原敏武さんでした。加藤さんの紹介にあるように篠原さんはその後フィンランド女性と結婚され、ヘルシンキ近郊

のカルキラという町に住んでおられました。私も一度、一九八八年五月に北欧諸国を視察した際に、カルキラまで足をのぼしたことがあります。

私自身は、「札幌唯研」の会員でもなく、「スタ研」が始まる経緯も知りませんでしたから、当初は、オブザーバーという資格で、出させてもらっているという意識でした。しかし、スターリン問題を研究するのに、経済問題を避けて通れないことは当然のことです。そこで、第一回研究会に出ている経済学関係者の佐藤俊二さんと私に、いつかスターリン主義と経済問題に関する報告をしてほしいという要請があつたと記憶します。

加藤さんと初めて会つたのは二回目か三回目の研究会の際です。懇親会での自己紹介の際、学生時代に緑会の会長をしたことがあると聞き、事情に疎い私は意味が不明でぼかんとしておりま

した。東大法学部の学生自治会の名称は初耳だったので、私には聞きなれないフロントとかメルトとかいろんな流派に出入りしたと語っていましたが、ひよつとしてトロツキーなどはもう卒業済みとの含みで話したのかもしれないと思っていました。

以後、定山溪や朝里川での宿泊研究会があ

るとすぐに、加藤さんから大月書店編集部がまとめたメモが逐次送られてきました。この記録により、大筋として、各人の仮テーマやモチーフの変化の様子が分かります。

しかし、加藤メモに示される、私の担当すべきテーマと論旨は、毎回変わっていて、七年七月末の第一次原稿締切りが過ぎ、八月一五日付けの督促状が届いた時期でも、何をどう論ずるか不鮮明だったことが分かります。

初回か、何回目の研究会かは思い出せませんが、私は、「スタ研」では、トロツキーとかトロツキズムを扱わないのでしょうかと質問しました。ロシア史やロシア革命についての全くの門外漢が、にわかにはトロツキー問題に取り組んだ経緯を紹介したうえ、タブーということばは使いませんが、トロツキー問題を扱わないのはまずいのではないのでしょうか、という趣旨の質問をしたと思います。その質問への反応は、トロツキーを扱わないというのではなく、メンバーのなかには担当者がいらないというもので、何かゲタを預けられた感じでした。

しかし、私自身が少しかじったのは、スターリン派によるトロツキーに対する否定的な

評価の是非であって、「トロツキーにかかわる経済問題」というテーマではありませんから、「スタ研」の要請に答えようにも私に当事者能力はありません。そこで、二回目か三回目の研究会で、土地制度史学会（現「政治経済学・経済史学会」）の学会誌（三八号、六八年一月）に載った南塚信吾論稿「ソ連邦「復興期」における工業固定資本問題——プレオブラジエンスキー理論を中心にして」のエッセンスを紹介しました。プレオブラジエンスキーはトロツキー派の経済専門家です。

ただ、私が紹介したのは、あくまで南塚論文の骨子であって自分の研究報告ではありません。しかし、質疑の中で、この論点は面白いので、私がか、南塚論文を敷衍する論考を書くよう奨めがあったように記憶します。議論ではほかに、左翼エスエル研究の専門家である高岡健次郎氏から、ネット移行後のボリシェヴィキの農村での立ち遅れを克服するための「農村に面を向けよ」という政策とその失敗を論じた文献があるという示唆がありました。浜内謙著『ソビエト政治史——権力と農民』（一九六二年）のことです。ソヴィエト政治史の大家である浜内謙氏は、その後、周知のように四部作の浩瀚な『スターリン政

治体制の成立』を書きあげ、さらに二〇〇四年には『上からの革命』を上梓します。「スタ研」が始まるころには既に、四部作第一部の「農村における危機」と第二部の「転換」が出ていました。

高岡さんの示唆は大変ありがたいものでした。しかし、浜内氏の業績は質量ともに、当時の私の理解力をはるかに超えるものであり、結論的に、拙稿第三章の執筆にはほとんど生かせませんでした。ただし、この四部作は私が一九九〇年代にジョレスの『ソヴィエト農業』の邦訳に取り組んだ際に、最もお世話になった文献です。

5-2) 私の本業。地域開発研究と日本資本主義の現状分析

そもそも、私が「スタ研」にオブザーバー参加したのは、スターリン問題を地元札幌で研究するというまたとない研究会の場で、短大夜間部の大学祭で話したような自分の見解が、一般に通ずるものかどうか確かめてみたいと思ったからで、それ以上でも以下でもありませんでした。つまり、自分がそこで自身の研究報告を行い、それを活字にして世に問うという課題を全く意識しておりませんでした。

というよりもむしろ、本業の経済学のほうでやるべき課題が山積しておりました。

出身学科は農業経済学科です。私が最初に全国誌に寄稿したのは毎日新聞社の『エコノミスト』誌で、一九七二年の九月のことです。ちょうど田中角栄の「日本列島改造ブーム」の頃で、青森県むつ小川原地域の「遠隔地巨大工業基地計画」が注目を浴びていました。

ところが、「改造ブーム」の怪しさの焦点として、青森県六ヶ所村にメディアが注目する一方で、北海道の苫小牧東部開発が、六ヶ所村と対照的に進捗している事態は、全国的にほとんど報じられません。六ヶ所村では農漁民の抵抗があつたのに、苫小牧周辺では異論が表面化しなかつたからです。北海道開発の定評ある専門家が、対応に苦慮した苫小牧周辺の幾つもの自治体から調査研究を委託され、私もその調査チームの一員となりました。地元北海道で、経済企画庁や通産省の意向とは独立して苫小牧研究をしていた研究者は少なく、東京や関西から調査団がくると、まず私を捕まえてヒヤリングをするというケースもありましたし、新聞記者から「取材」されたこともあります。開発問題の連載記事を書いていた「朝日」の本多勝一氏が、現れた

こともありました。

依託研究が機縁で、六ヶ所村や志布志湾、鹿島町、岡山県水島地区など、「開発」で揺れる全国各地の現地調査に出かけ、また、地方の行財政分析に取り組むようになり、こうした流れから、札幌大での担当科目も、「財政学」と「日本経済論」にチェンジしてもらいました。私が、宮下柁次氏（故人）の誘いで日本資本主義分析の共同研究を開始し、のちに御茶ノ水書房から共著『日本帝国主義の現局面（上）』を出してもらった背景でもあります（『日本帝国主義の現局面（下）』は宮下氏の単著）。

一九七八年三月に私は、宮下氏と共編で大学の紀要に、二年ほど北海道拓殖銀行本店調査部の図書室に通いながらまとめた「資料……『日本帝国主義の現局面』』という二五六ページの統計資料集を掲載しています。ということとは、『序説』第三章の執筆は、宮下氏との統計資料の編集作業と併行して進められていたことになりました。

私はさききに、『序説』刊行前夜に、第三章を書くだけの研究をしていなかった旨、述べました。それは、私の非力のためであることが基本ですが、ここで述べたような、講義や

統計の編集に追われていた事情もありました。

5-3 暑中見舞いの助言

しかし、オブザーバー参加をしてみても、「スタ研」が想定する研究テーマの柱に、なぜトロッキー問題がないのかという疑問があつたことも事実です。そして、私はオブザーバーでありながら、かなり明け透けに、自分の疑問を遠慮なしに申し上げたと思います。藤井先生は「佐々木さんの挑発にのつた」という表現をなさつたことがありますがおそらく相当不躰な発言をしたことがあつたでしょう。私の不躰な発言をここで正確には再現できません。しかし、つつみ隠さずに言いますと、趣旨としては、こうです。ミイラ取りがミイラになつて私が辿りついた考えは、たとえ、私自身にとつて新しい知見と思えるにしても、トロッキーがソヴイェト史における最大の反革命分子などではありえないなどという事実は、ロシア史の専門家や非共産党系の活動家にはまったくの旧知に属することである。そうすると、今もつてトロッキーに対してレーニン主義の敵とか最大の反革命分子とかいうレッテル貼りが繰り返される事情には、そうした虚構を熟知しているはずのロシ

ア史専門の研究者が、党上層部の非を諷めたことがないところに原因があるのではないかと……。表現法は違っても、そういう大変不遜な発言をしたのだと思われれます。藤井さんが私の挑発があつたと仰るのは、以上のことに関係があるのかもしれない。

しかし、先にも述べましたが、トロツキーをとりあげる問題は結局、私にゲタが預けられる形になりました。

自分の非力と課題の重さとのギャップに戸惑い、そこから抜け出せないでいた私の肩を、解してくれたのが、例の、加藤さんの「暑中見舞い」でした。短くてもよい。「とにかく、一論点」でも、と赤字のボールペンで記されていました。私は気が楽になり、中野さんにも高岡さんにも相談せず、何とか第三章を書き上げます。中野さんが私の自宅に「督促」のために訪れたときは、そういうタイミングであつたように思われます。

オウム返しになりますが、拙稿第三章には、様々な限界や問題点が含まれていました。例えば、溪内謙氏の業績をいまいし理解できていたなら、ソ連共産党第一二回大会の決定の前提となる諸条件が、非常に脆いものであることが露呈していく事態を、より広く視野に

収めて思考できていたかもしれません。しかし、私には、そこまで目配りして執筆するだけの素養も時間的猶予もありませんでした。そして、そうした限界を自覚しながら、それでも活字にする意義があると自分に言い聞かせて、原稿を提出したのでした。自分とは、無自覚のうちにかにスターリン主義に汚染されていたことかと、遅まきながら気づいたあの自分のことです。

(6) 『序説』の、「意図せざる」結果と反響に移ります。

6-1) 読者の反応

拙稿第三章に対する書評と読者カードの反応についてはすでに私見を述べました。

加藤分析によると、他の刊行物の読者カードの戻り方に比べると好感度の反応が多いとの事でした。

ただし、私の友人・知人に関して言えば、民青嫌いの友人たちの好感度に比べて、私の昔の仲間たちの多くは、感想を言わないところに特徴があるように思いました。拙論が説得力に乏しいものであつたことによる面があつたからでしょう。呪縛が解けていない友人が多いのかもしれないと思いました。

6-2) 機関紙にみる日本共産党の反応

加藤さんは『赤旗』紙上における大野正一氏、足立正恒氏ら理論幹部の『序説』批判と思われる一連の記事を、「ある意味では意図せざる結果」と見ながら、藤井先生や私は、違う見方をしているかも知れないと述べていました。加藤さんのスタンスは、「トロツキーもブハーリンも正当な歴史的評価がなされればいい」というもので、トロツキー問題が解禁されるかどうかは、編集者として関心なかつたとのことでした。

私自身も、「正当な歴史的評価がなされればいい」というスタンスに異論ありません。しかし、「正当な歴史的評価」をめぐる論議を許容できるだけの度量を共産党はもたないし、そのことが、多くの学生活動家を苦しめ、あるいは青年学生運動における無用で不幸な混乱を長引かせている現実を重視すべきであるという認識の点では、加藤さんとスタンスが異なっていたのではないかと思われれます。私は、革マルや中核、四トロを含め、仮に、彼らの中に自派の教祖はトロツキーだと主張する人物がいたとしても、彼らがトロツキーを本当に理解しているとは到底考えられないことでしたから、彼らをトロキストと呼

ぶこと自体甚だしい誤りだと主張しておりました。全共闘系については問題外です。したがって、彼らを十把一からげに、トロッキストと称することは、学生運動に多大な混乱や犠牲をもたらすとも考えていました。

私からみると『序説』刊行を前後して、『暴力集団』に対する表現法に微妙な変化が現れました。

『序説』公刊以前であれば、『赤旗』記事の見出し項目として「トロッキスト暴力集団」と称していた同じ「ゲバルト系」集団を、どうやら、「ニセ左翼暴力集団」と総称する言い方をするようになったのです。

それを如実に示すのが、七八年三月一二日付け『赤旗』に掲載された全学連第二八回大会における不破哲三書記局長のあいさつ全文です。ここには、ゲバルト系の暴力集団との闘いの重要性はでてきますが、トロッキストという呼び方は一切出てきません。

同年同月二七日に四トロなどのゲバ集団が成田空港管制塔に乱入し機器を破壊する暴挙に及んだ際、やはり、トロッキストという見出し項目は消え、ニセ左翼暴力集団と呼んで糾弾しています。

もう少し細かく跡づけますと、『序説』刊

行日である一九七七年二月一日と翌十六日の『赤旗』三面には、「大学の暴力集団トロッキストとは何か」という「上」「下」の大きな記事がでてきます。記事は「さいきん、京大や中大、東大などいくつかの大学でトロッキスト暴力集団による暴力事件があいついでいます」という書き出しから始まっています。

一週間後の一二月二三日付け同紙一面には、「京大七自治会が民主化」の記事があり、本文は「トロッキスト暴力集団の暴力一掃、大学の自治、学問の自由を守る学生の運動が大きく前進している京都大学で……」の書き出しになっています。

ところが、年が明けた一月九日付け一面冒頭の「京大学生四団体「暴力黒書」第三弾を発表」という六段抜き記事の本文には「トロッキスト」という呼び方はなく、「京都大学のひとにぎりのニセ「左翼」暴力集団が学内十八箇所を不法占拠し、……」という言い方に変わっています。

以上の変化は、『赤旗』の見出し項目上の変化ですから、日本共産党がトロッキキーを「レニン主義の敵」、最大の「反革命分子」とみる判断に変化が生じたことを意味するもの

ではありません。

あらゆる系統のゲバルト系集団を、いわば十把ひとからげに「トロッキスト暴力集団」と規定し続けることが、もはや得策でないという判断が働いたものと思われました。何の説明なしに言い方がかわり、何事もなかったように全体が右に倣う行きかたが継承されていました。

6—3) 道党幹部からのよび出し

私は組織を離れて三〇年にもなりますし、愉快でない出来事の多くは忘れたことにしておりますが、『序説』刊行をめぐる正史ではない「付録」の範囲で一件、紹介しておくべき個人的な体験があります。

『序説』刊行後、三回か四回、道党幹部から、拙稿第三章をめぐる私の言動に関連して呼び出しを受けたことがあります。うち二回は、のちに国会議員となる幹部も同席することがありました。

初回の七八年三月二一日のよびだしの際のメモのみ、手帳に記録が残っています。

呼びだしの要件は三つでした、ふたつが、『序説』からみです。そのひとつは、『序説』執筆者のひとりの橋本剛さんが、組織の承認を得ないでドイツに留学したのは問題だとい

う件で、帰国を待つて橋本さんと意見交換を
したいという話でした。いつ日本に帰国する
のか、ひよつとして私に聞けば分かると思っ
たのかも知れません。数年後、同氏は除名処
分になります。処分理由のひとつに、上級
機関の同意なしに海外旅行をしたことが含ま
れていると聞いたことがあります。今も、そ
ういう入管機関のような内規があるかどう
か、私は知りません。

二つ目は、私が友人たちに出したハガキ(年
賀状)で書いたことが、中央と異なる傾向の
書物を出したことを強調するように受けとら
れていて、そういう書き方には問題がありま
すよ、という忠告のようでした。しかし、こ
の忠告は驚きでした。今はこのコンビニで
も年賀はがきの「簡易印刷」をやってくれま
す。わたしは七八年の賀状に、そのころ出ま
わっていた「簡易贈写版」を入手し、二〇人
くらいの友人・知人たちに『序説』で私が何
を書いたかを知らせる「短文」つき賀状を投
函しました。これは全くの私信であるわけ
ですが、指導部からすると、私の年賀状は、不
特定多数の「読者」に配布した不穏当な「印
刷物」に見えたらしく、私にたいする「指導」
の必要を感じたのが、よび出しの原因のよう

でした。

二回目以降のよび出しの時期と内容は、よ
く覚えていません。

ただ、はっきり記憶にあるのは、拙稿第三
章のような主張は、日本のトロツキスト暴力
集団の犯罪的な役割をあいまいにするもの
で、党の路線とは相容れない。厳密にいえば
規律違反にあたる、というものでした。そし
て、あと二回ほど、同様の「指導」があつた
ように思います。「指導」の内容は、前述し
た榊氏や宮森氏ら理論幹部たちの主張と全く
同じものでした。

二回目以降のよび出しは、ひよつとすると、
私が七八年三月末に、『赤旗』編集部に送つ
た質問の手紙に対する、間接的な「回答」で
あつた可能性もあります。私に対する明言は
ありませんでしたが、同紙編集部が私に直接
返事をだす代わりに、道党幹部が、私を呼び
だして、私の質問に対する「回答」を含めた「指
導」をしたのかもしれない。後日、そう思
うようになりました。

私が編集部に送つた質問書とは、前述の、
七八年三月二六日に起きた第四インター派に
よる成田空港管制塔襲撃事件に関する同月二
八日付「きょうの社会科学」欄の「第四インタ

ー」という説明記事には、多くの疑義がある
として、五項目の質問と意見をのべた手紙の
ことです。記事は、「第四インターナショナル」
は、ロシアのトロツキーが、一九三八年
につくつた国際的な反革命の組織です」など
と説明していました。

私は、スターリンから見れば第四インター
はたしかに「反革命」という。しかし、
一九三八年の時点で、ソ連国内でスターリン
が進める未曾有の大粛清に抗議し、それに反
対する内外の人々を結集するため、第四イン
ターを立ち上げようとした行為は、決して反
革命と言えないという考えにたち、いくつか
質問しました。

私が質問したさいの見地は、非共産党系の
識者には別に取り立てて奇異のものではあり
ませんでした。

(7) メドヴェージェフ双生児研究

「付録」の最後は、『序説』がひとつの機縁
になった、メドヴェージェフ兄弟研究につい
てです。

兄弟には大変お世話になった思いがありま
したので、その後も、新刊書がでると必ず読
んでおりましたが、しかし、語学力のない私

が、将来いつか、兄弟の著書の邦訳者になることがあるとは思ってもみませんでした。

しかし、私は、ある偶然からジョレス著『ソヴィエト農業』を邦訳する機会があり、この二〇年ほどジョレスと交流を続けてきました。一方、ロイが一九九九年に来日して札幌にも足を延ばした折に、ロイとも個人的に知り合いました。ジョレスとロイがともに講演をしてくれた大学は、日本では札幌学院大学



ジョレス・メドヴェージェフ夫妻と
ロンドンのご自宅にて

二〇一一年に定年退職。著訳書や論文などは「佐々木洋教授の略歴および研究・教育業績等」（札幌学院大学経済論集『四号（佐々木洋教授退職記念号）、二〇一二年三月）を参照。最新の仕事として、ネルソン・リクテンスタイン著『小売革命 Retail Revolution』の邦訳書が『週刊金曜日』発行元の金曜日社から年内に出る。

なお、詳細な年表つきの拙稿「日本人はなぜ、地震常襲列島の海辺に『原発銀座』を設営したか？—3・11原発震災に至る原子力開発の内外略史試作年表」が加藤哲郎氏の「ネチズン・カレッジ図書館」にもアップされている。

ささき・よう◎

一九六九年、北海道
大学大学院農学研
究科修士課程修了。
札幌短期大学商業科
助手、札幌商科大学
商学部経済学科助教
授。「財政学」や「日
本経済論」、「景気循
環論」などを担当。
一九八四年、札幌学
院大学に大学名が変
更となり、一九九一
年に同大学教授。

と北大だけです。

二〇〇五年に現代思潮新社が二人の共著『ソルジェニーツィンとサハロフ』の邦訳版を出した際、この著作の解題を書いて欲しいと、然るべき方々にお願したようですが、なかなか引き受けしてもらえそうになかったようです。結局私がお引き受けしたのですが、それは私に論評能力があったというものでなく、兄弟と個人的に親交のある日本人研究者が下斗米伸夫氏と、私しかいないという事情からだったようです。『ソヴィエト農業』も、ジョレスは下斗米氏に邦訳を打診したようですが、同氏が超多忙だったため叶わなかったと聞いています。

そういう経緯もあり、この二〇年近く、私はメドヴェージェフ兄弟研究を、ひとつの研究テーマとしています。

これは、もとをただせば、『序説』とのかわりから生じたことです。

スターリン批判の研究には、兄弟の共著『知られざるスターリン』（二〇〇三年刊）も必読書のひとつです。

兄弟は、この一月で満八八歳になります。現役の著作家です。兄弟の稀有な生きざまに興味ある方は、天野尚樹さんと私が

共訳したメドヴェージェフ兄弟共著『回想 1925—2010』（二〇一二年）をご覧ください。

現在は、協力者の方と、ジョレスの『ルイセンコ学説の興亡』のロシア語原著からの完訳の仕事にとり組んでいます。既刊の邦訳書は、英語版からの重訳です。英語版と露文原著とで、異なる箇所が少なくありません。

名訳のロイ著石堂版『共産主義とは何か』も英語版が底本です。いずれ、露文原著からの完訳版が求められるでしょう。メドヴェージェフ双生児に関心のある若いスターリン問題研究者の登場を切に期待してやみません。